

3

こどもの要求に応えるだけの対応を
してはいけない！

★「一対一」のときのこともの要求にどう対するかがポイント

【事例9】 小学校一年生の男児I君。ひとり親家庭。母親には、自分がかわいがりたいたきだけに、恣意的にこどもをかわいがる傾向がある。授業中は立ち歩きが多い。鉛筆をいじったり、机を叩いたり、奇声をあげることもある。だだをこねて、泣き出すと幼児のような声で泣く。教師が二人きりの場面でかかわると、比較のおとなしい。クラスメートのしていることをしばしば邪魔する。特別支援学級では、教師に猛烈に抱きつき、なかなか離れない。

たとえば、親御さんがかかわっていても、こども本人が求めているときにかかわるのではなく、

「親がかかわりたいときにだけかかわってくる」とこどもが受け止めれば、愛着の問題が起きます。

その証拠に、「事例9」のI君は、授業がわからずおもしろくないというネガティブな感情が生じると立ち歩きます。鉛筆などモノを触って安心を求めたり、ネガティブな感情、嫌な気持ちを紛らわせるため、机を叩いたりします。だだをこねるのは、自分の思いと食い違うことが起こるとそれを受け入れられない状態を表しています。幼児のような大泣きは、感情的にパニックが生じていることが想定できます。奇声もよくあげていることから、自閉症スペクトラム障害（ASD）と愛着障害が併存する第三のタイプの愛着障害である可能性が高いでしょう。

I君は、教師と二人だけの「一対二」の場面では落ち着いていて、教師一人に対してこどもがたくさんいる「一対多」の場面でもよく問題が発生しているようですが、これも愛着の問題の特徴です。「一対二」は「特定の人」との絆である愛着形成の状態と近いから落ち着けるのです。だからI君は、その「一対二」の状態をつくるのを邪魔していると感じるクラスメートに対して嫌がらせをさせていただきます。自分ができないのに他児ができているとやらやましくなったり、嫌な気持ちになってしまうことも、この行動を助長します。他児から「やめてよ」と言われるとよけいに嫌な気持ちが増えますから、その子を叩いたりする攻撃行動も現れるのです。

問題は、「一対二」のときのこどもの要求にどう対応するかです。特別支援学級などではこどもの数が少なかったりするので、よけい教師への独占欲が強くなり、抱きつき行動がよく現れるのかもしれない。この事例の先生もそうでしたが、優しいがゆえに、抱きつかれると抱っこして

いたので、I君の抱きつき行動は日増しに増えていきました。先生が「離れて」と言ってもI君はなかなか離れず、無理に離そうとすると嫌がってよけい離れなくなるという悪循環になってしまっていました。

こどもが抱きつきたいなら気がすむまで抱くという対応は、愛着障害のあるこどもには「してはいけない対応」です。抱きつきたいなら抱いてあげれば、いつか満足して気がすむだろうと思うかもしれませんが、これが間違いなのです。愛着障害のあるこどもは、自分が要求したことをしてもらって、その要求が満たされても、全然、安心できない、こころは満たされないのです。それは、「今は要求したら抱いてくれたが、次に要求したときに抱いてくれる保証はどこにもない」「要求しないと抱いてくれないかもしれない」という思いを持っているからです。

こどもの要求を満たすには、本人の満足感・安心感を満たす装置、すなわち、「愛情の器」ができてくること、できていてその器の底に穴がなくて感じた安心感や愛情を貯めておける状態がないと満たされません（第1章⑤参照）。「愛情の器」の受け入れ口が小さければ、要求してもその一部しかもらえなかったと受け取るでしょう。だから、愛着障害のこどもの要求を受け入れる対応はうまくいかない結果につながるのです。

そして、そもそも要求したのはこども本人です。こどもの要求に応じるということは、こどもが「先手」をとって行動を開始してしまっており、その後に行った対応はすべて「後手」になってしまうため、支援の効果はほぼないということです。

ここがポイント、理解と支援

愛着障害のあることも、教師一人に対して子どもがたくさんいる「一对多」の場面では愛着の問題がいつぱい発生するが、教師と二人きり、「一对一」になると落ち着くという特徴がある。その「一对一」のときの要求にどう対応するかが、かわりのポイントとなる。愛着障害のあることも、自分が要求したことをしてもらって、その要求が満たされても、全然、安心できない、こころは満たされない。子どもが「先手」をとった行動にただ対応する「後手」の支援では、効果がない。

★「先手」をとって、感情のラベリング支援を

では、どうすればよいのでしょうか。

まず、抱きつかれたとき、そのまま抱っこするだけでは、「後手」の支援になってしまいます。こちらが「先手」を握り返すためには、子どもが求めた要求の満足度が一瞬高まるような対応をして、その行為を終了あるいは切り替えしやすくするのです。例えば、抱きつかれたら、ぎゅつと抱きしめて、抱かれ感を最大の状態にして、そのときの感情をラベリングします。「今、ぎゅつと抱きしめられて気持ちいいね!」と。

次に、この気持ちのよさを媒介にして、「あのね、先生と握手しよう。握手すると、とっても気持ちがいいんだよ！」と、気持ちいい行動が発生する別の行動に誘います。この握手は抱きつきとは違い、こちらが「先手」をとった行動ですから、この後、生じる「先生と握手すると本当に気持ちいいね！」という、愛着対象を意識した感情のラベリング支援をすることができなのです。

これは単なる代替行動支援ではありません。感情のラベリングを媒介とした感情確認後の、感情と連結された代替行動支援です。感情を媒介にしない代替行動支援は、愛着障害の支援ではほぼ成果にはつながりません。

一番の「先手」支援は、例えば、特別支援学級に子どもが来たらすぐに、「これしよう！」とこちらから何らかの行動に誘うことです。そして、その行動を教師と一緒にしたことでは生じる感情をラベリングして、言い当てるのが大切です。子どもがうれしそうな顔をしているからうれしんだらうと憶測して放置したり、「今、どんな気持ち？」などと感情を問わない。感情をキーパーソン（教師）が言い当てるのが大切です。

「事例9」のI君もそうでしたが、どうしても接触感を求める子どもには、キーパーソンのほうから率先して、身体に触れることが必要です。教室に来たら、まず先に握手、その後、腕をさすってあげる、肩をもんであげる等、こどもが嫌がらない、年齢的にみて不適切でない接触行動をして、「先生に触れてもらおうと気持ちいいね！」と確認した後、「これしよう！」と誘えばいいのです。

I君の場合、自閉傾向もありましたから、まず、抱きついたときに、満足して終える練習を一

一つ目標設定しながら行っていくことをアドバイスしました。ぎゅっと抱いて終わる練習、握手して終わる練習、こちらから握手を求めるとそれに応じる練習、抱っこを要求した後で握手で応えて満足する練習というように。他にも、自閉スペクトラム障害を併せ持つ第三のタイプの愛着障害ならではの支援もアドバイスしましたが、ここではそれは割愛します。

ここがポイント、理解と支援

愛着障害のあることには、「先手」支援を意識する。子どもの要求には、その要求の満足度が一瞬高まるような対応をして、「気持ちいいね！」と感情のラベリングをし、その気持ちのよさを媒介に、別の気持ちのいい行動に誘う。そして、「先生と○○すると本当に気持ちいいね！」と、愛着対象を意識した感情のラベリング支援をしていく。

★**子どもに「主導権」を握られたままの対応は「愛情欲求エスカレート現象」につながる！**

【事例10】 小学校二年生の男児J君。支援員が寄り添う「一対一」の支援体制がとられている。しかし、J君は授業中、すぐに教室を飛び出す。支援員が追いかけると、こちらを確認しつつ、さらに逃げ回る。一方で、支援員によく抱きついてくる。できそうなもの、いいことを「やった」と大言壮語のウソをついたり、よくないことをしたのに「やってない」